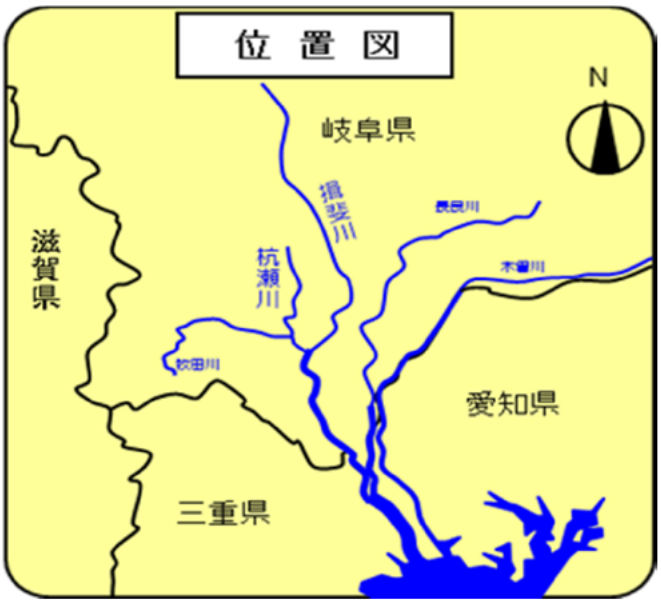


かつて舟運で栄えた杭瀬川（くいせがわ）

■かつては揖斐川の本流 「杭瀬川」

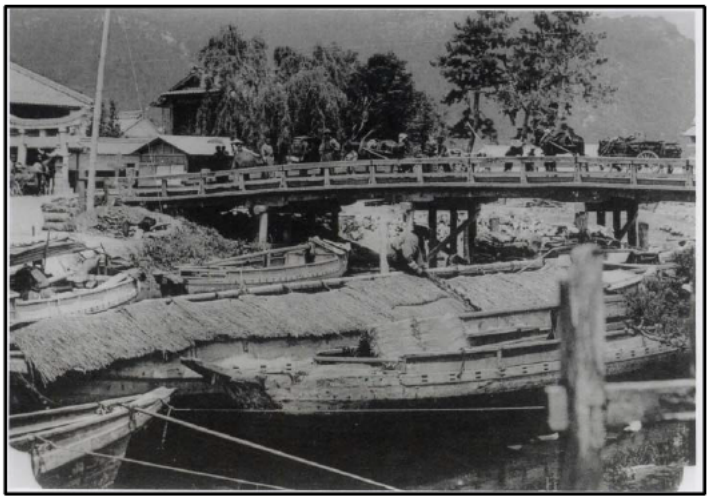
- 杭瀬川は、岐阜県揖斐郡池田山（いけだやま）を源に、東斜面の谷々の水を集め南流、池田町、大垣市を流下しながら、牧田川（まきたがわ）等の支川を合わせ、揖斐川に合流する幹川流路延長24ｋｍ、流域面積153km²の一級河川である。

西暦672年の「壬申（じんしん）の乱」で、兵士がこの川で、疲れきった身を癒やしたこと、「苦（く）を癒した」ことが、「くいせがわ」の名前の由来とされている。杭瀬川は、元々、揖斐川の本流であったが、享禄３年（1530）に発生した大洪水で流路が変化し、現在の形態となった。

揖斐川の流路変遷図

■杭瀬川舟運の中心地「赤坂湊（あかさかみなと）」

杭瀬川の水面勾配は非常に緩く、平均水深約1.0mの河川で、年間を通して水量が安定しているため江戸時代から水運が盛んな河川であった。その中心地は中山道が交わる赤坂（大垣市）で、杭瀬川筋から牧田川を経て桑名方面に連絡していた。諸藩の蔵米や材木、酒などを輸送するとともに、旅人の交通路としても大いに利用されていた。赤坂より上流の杭瀬川舟運が盛んになるのは明治に入ってからで、明治25年（1892）頃、市橋に湊が設けられて、特産の石灰などを積み出していた。赤坂湊は金生山（きんしょうざん）の石灰産業の発達とともに製品輸送の主役となり舟運が活発となり、明治40年（1907）から大正７・８年（1919）頃までが最も繁栄し、常時月間350隻の舟が名古屋まで往復していた。



赤坂大橋と赤坂湊（大正時代から昭和初期）
写真：大垣市立図書館提供

大正8年（1919）に国鉄美濃赤坂駅が開通し、昭和13年杭瀬川水門（大垣市笠木町地先）ができると船の運行は困難となり、杭瀬川舟運は衰退していった。

赤坂湊の展示資料館（赤坂湊会館）

昭和25年（1950）には河川修によって現在の流路となり、かつての流路は用排水路化し、湊の位置に「赤坂湊」碑が残っているだけで、昔の面影は全くない。

川湊跡（平成26年６月）

■杭瀬川を往来する船の中継湊　「塩田湊と常夜燈」

- 明治13年（1880）8月に杭瀬川を往来する船の安全祈願と航路標識、伊勢両宮への献燈として塩田湊の西側に塩田常夜燈が建立された。当時、杭瀬川舟運がこの地方の物資輸送に重要な役割を果たしており、特に桑名湊と赤坂湊との間で船の運航が盛んであった。その中継湊として塩田湊は、常に20～30隻の船が停泊し船頭相手の銭湯、米屋、雑貨屋等の店が軒を並べ大変賑わっていた。
- 昭和20年（1945）頃、この辺りは水量が多く、川幅も広く、深く水底まで透けて見える美しい流れであったため、当時、大垣中学の水泳場になっており、浮き板を使い、バタ足の練習をしていたという。また、この辺りは舟だまりになっていて、三々五々、船頭さんが七輪で自炊をしていたという。
- 杭瀬川河畔では、毎年夏に花火大会があり、塩田橋が落ちなければいいがと思うほど近郷近在から大勢の人が集まってきた。また、この道は、昔の大垣祭りや11月の御坊さん詣りには、人の流れが途絶えることなく、賑やかな通りであった。

塩田常夜燈

旧塩田橋　（昭和初期頃）　写真：大垣市立図書館提供

旧塩田橋　（平成26年6月）

■杭瀬川に浮かぶ屋形船

- 昭和30年代から40年代にかけて、塩田橋左岸に屋形船２艘係留されており、夜の宴会などで賑わったていた。杭瀬川の堤防には、多くの桜の木が植えられており、桜が咲く時期には、夜桜見物も兼ねて、大垣周辺の人々や近くの町内から多くの人が訪れていた。

屋形船は、水門川（すいもんがわ）を航行する船より少し大きめで、定員10人程度の宴会が出来たようである。船の中には、船の向きに合わせて机が置かれ、向かい合って話をしたり、食事をすることができた。料理は、主にすきやきが中心で、皆でつついて賑やかに食べることができた。当時、塩田橋を行く人の目を惹いたのは、白字の看板に筆太に大書された「すきやき」の文字。すきやきは、ご馳走で、この船で食べることが１つの楽しみであった。

中には、食事の途中で暑くなり川で泳いでいる人もいた。昔は川の水量も多く危険であったが、皆、小さい頃から川で泳いで慣れていたため溺れるような人はいなかった。また、塩田橋の東詰には小料理屋があり、軒に吊された幾つかの赤提灯が川風に揺れていたのが印象深かった。

杭瀬川の屋形船（昭和40年頃）
写真：大垣市立図書館提供

■杭瀬川近くの石屋「山石」　ポンポン蒸気船で石材運ぶ

- 静里町（しずさとちょう）には、明治の頃から「山石（やまいし）」という屋号をもつ石屋があり、墓石を中心として、石碑や石塔、鳥居などを造っていた。この初代は、久徳（きゅうとく）の一里塚や石碑、静里の秋葉神社の鳥居を作ったり、谷汲山華厳寺（たにぐみさんけごんじ）に燈籠を寄進したりするなど、現在でもその名を石碑の銘に見ることができる。

石屋の仕事は重労働で、特に原料の石材を運ぶことに大変苦労したという。石材は主に愛知県の岡崎から仕入れていたが、大正末期から昭和初期にかけては、揖斐川、杭瀬川をポンポン蒸気船で運んでいた。ポンポン蒸気とは、焼き玉エンジンを備えた小型船で、当時「ポンポン、ポンポン」という音が遠くから聞こえ、船が着いたのがよく分かったという。石は、現在の旧塩田橋付近で荷下ろしをしたが、それからが大変だった。まず、橋付近に石を下ろすのだが、そのまま地面に下ろすと、今度持ち上げるのが大変なので、地面に丸太を組んだような台をつくり、その上に石を置いた。それから大変なのは運ぶことである。当時、石屋には２～３人の使用人がいたが、その人数だけでは運べないので、家族総出、そして近所の人にも手伝ってもらい運んだ。

久徳町の一里塚にある石碑

ポンポン蒸気船（昭和10年頃）　写真：個人蔵

■水車が並ぶ杭瀬川

・　戦前、大垣市内を流れる河川では水車が見られたという。精米や製粉用の水車もあったが、多くは川の水を稲田へ汲み上げるものであった。杭瀬川の西側にはおよそ50メートル毎に水車が設置され、田植え前から夏の間にかけて稼働していた。

　闇が濃くなると、「天の川ホタル」がほとりの柳から柳に飛び交い、風情があったという。

　昭和初期の絵はがきを見ると、川の流れとともにのどかでゆったりとした時代の流れが感じ取れたという。

水車が並ぶ杭瀬川（昭和10年代）
出典：書籍「ふるさと大垣」より

■裸男が飛び込む杭瀬川の奇祭　「節分会はだか祭」

・　伊吹（いぶき）おろしが吹き、北風が冷たい２月の節分の日、野口の宝光院（ほうこういん）では節分会はだか祭りが営まれる。下帯姿の裸男たちが家内安全や商売繁盛を願ってみそぎの川渡りを行う。別名、「みそぎ川渡り」とも言われ、川を渡ることは、人生の荒波を乗り越えることにも似ていて、その様子を見物客も自分自身に照らし合わせて感動し、裸男が川に入ると歓声を上げ、見物客と裸男が一体になる。川を渡り切ると、裸男たちは肩を組み合って「わっしょい、わっしょい。」の掛け声とともに境内に戻り、本堂から心男を担ぎ出し、競うように心男の体に触って厄落としをする。

みそぎ川渡り（平成26年2月）　写真：岐阜新聞社提供

■杭瀬川の川下り

・　近年、大垣市は杭瀬川沿川の小学校を対象に、舟下りイベントを企画し体験学習に取り組んでいる。

　この体験は、地域の自然や歴史について学ぶ授業の一環で、西濃水産漁業協同組合の協力を得て実施。船頭を務める同組合員から川に生息する魚などの説明を受けたり、川岸のヨシの葉で舟を作って流したりするなど、いつもと違う目線で眺める川での舟下りをのんびりと楽しむことが出来る。杭瀬川舟運は、時代の流れとともに形を変えながら、今でも引き継がれている。

杭瀬川の川下り体験（平成25年9月）　写真：大垣市役所提供

※本資料の記載文書は、大垣市史（輪中編・民俗編）、KissoVol.60等を参考としています。